〈佳作〉

森と湖の北海道を永遠に

種市　佐改

はじめに

海抜二一五〇メートルの草津白根の山頂でこう考えた。東京から僅か四時間余のこの地に、こんなすばらしい風景が展開するのに、東京の人びとはなぜ高い旅費と貴重な時を消費して北海道を訪れるのであろうかと。

それは草津・奥志賀の旅の道程のことだった。草津温泉では熱湯のたぎる湯畑を中心とした古い湯の町の情緒にひたり、一段高いところの近代的な観光ホテル群と、更にその上部の明るいペンション群に近世と現代の観光地が同居している感動を覚え、更に車で三十分、北海道の最高峰旭岳に比するほど高い白根山頂に立って、その雄大な眺望にひたっての実感だった。

ここは東京から日帰り観光が可能な地である。それなのになぜ…と考えたときに樹海の無いことに気がついた。北海道の国立公園では当然あるべきはずの樹海が、スキー場となりゴルフ場となっていた。奥志賀を訪れて更にその感は深くなった。リフトを乗り継いで二一二五メートルの東館山に簡単に登ることができた。だがその山頂からの眺めは、樹海がスキー場の草原と十数列のリフトの林に代った悲惨な自然の姿だった。

二度目の四国の旅では四国観光の最大の欠点が天然の湖の無いことであることを知った。四国は歴史と心の旅路。西国八十八箇所の霊場があり人情もこまやかだ。羊腸の道と段々畑、それに白砂青松の女性的な海岸も、足摺や室戸岬に代表される男性的な海岸美もすばらしい。だが、何日か旅を続けているうちに妙に息苦しいものを感じた。それは樹海と同様に北海道では当然あるべきはずの青い湖が無く、湖が与えるゆとりや、やすらぎが欠落しているためと膚で感じとった。

四国には教科書の地図に記入されている天然の湖沼は見当らない。あるのは満濃池に代表される灌漑用の池と、ダムによる人造湖だけである。それも主要観光ルートから外れて点々と所在する。それに四国の樹木の象徴である松の被害も目立った。松山市に近い名刹石手寺でも、国宝の古建築物や弘法大師の肉筆・遺品もさりながら、私にとっては境内の老松が魅力だった。しかし今回の旅では何物にも代えがたいこの老松が、マツクイムシの被害によって大部分がチェンソーで伐られている最中だった。チェンソーの音は私の骨身を削るような無慈悲の音に聞えた。

これに対し、北海道は何と恵まれていることだろう。日本の湖沼の大きさ二十位までの中に北海道所在のものが八湖もある。これ以下のものにも摩周湖・阿寒湖・然別湖・大沼など多士済済、まさに湖の豊庫である。四国を例としたが、九州全島を見渡しても五十位まで入るのは開聞岳山麓の池田湖ただ一つだけなのである。その上マツクイムシの被害も今のところ北海道に影響はない。

さて、自然保護を論ずる場合、生態系の維持保存もあれば開発に処する対応もある。そしてその規模も地域的なものもあれば、世界的規模のものもあり、この限られた小論では総てにふれることはできず、また筆力もない。

そこで私としては北海道で掛け替の無い貴重な自然の財産と考えられる森と湖が、人間の行為に対してまことに弱い存在であることを知っていただき、その保護と観光事業のありように重点を置き、あわせて日ごろ考えている地球規模で進む森林破壊への気くばりなどを書きとめてみたい。

兵器を緑に

私は宴席などの食膳では、自分の腹を考えて食べきれないものに対しては箸をつけないようにしており、残った料理に対しても「難民の皆さんごめんなさい」と、心の中で合掌するのが習慣となってしまった。それはテレビのブラウン管を通して放映されてきたベトナム難民や、最近のアフリカ飢餓難民の姿が、豪華な過飽食のお膳に同映されるためである。

特に罪のない子供たちの栄養失調の姿はいたいたしい。私にも戦後食糧不足の栄養失調のため、妻は目を失いかけ、次男は麻疹の回復力もなく死水までとって蘇生させた体験を持つ。それも僅か三十数年前のできごとだ。

もし、地球上から人類が消滅する危機があるとすれば、それは核戦争による巨大な破壊力や、気象を激変させる核の冬と、森林の崩壊に伴なう砂漠化・気象変化・食糧飢餓にあるという。

だが、いま地球上ではアフリカ難民を飢餓放浪させている砂漠化現象が、過速度で進行している中で、超大国では力こそ平和と信じ核兵器や軍備縮少の会議は常に空転し、ぼう大な予算を投入しての新兵器開発に余念がない。英知を持ち総ての生物の生存の鍵を握っているはずの人間が、死滅に向う二つの大きな誤りを同時に進行させているのはどうしたことなのであろう。北海道の自然保護とは関係の少いことがらではあるが、その原点として広い視野に立って現実を見つめる必要があるのではなかろうか。

青い海・白い多島海・パルテノンの遺跡など、ギリシャの旅は美しさと古い文明を求めての感動の旅だった。だが、それは同時に文明が自然を食いつぶしたことを知る旅でもあった。

昔ギリシャは豊かな森林に恵まれた国であったという。先人はその森を伐り家畜を放牧して文明を支える糧とした。石灰質の白い大地の僅かな表土は、過放牧のためやがて地力を失い、文明の活力をも失ってしまった。青い海と白い陸地の美しいコントラストはその結果であり、パルテノン宮殿も考えようによっては廃墟でしかない。

同様なことは今戦火を交えているイラン・イラク地方に広がる中近東の砂漠についても言い得るという。ここでは自然を破壊し尽した砂漠の中で、限りある石油資源を兵器に代えて更に破壊の限りをつくしている。悲しいことだ。

同じ中近東諸国でも、アブタビでは石油資金を基に緑の復活に努め、一本八千円という高い代償を払って積極的に植樹を実施している。兵器を捨てて緑の復活を！　こうした考えが普遍的なものにならないものであろうか。

ここで世界の森林の現状を直視しておこう。地球上ではいま毎年二千万ヘクタールの森林が消滅し、このままの勢いで推移すれば西暦二千年には主な樹林帯の総てを失いかねないという。一日五万五千ヘクタール、日本一広い釧路湿原の約二倍の豊かな森林が毎日消えている。

その最も顕著なのがアフリカのサヘル地方ベルト地帯で、爆発的な人口増加が燃料用として樹木をそう失させ、食糧としての家畜が草地を食い尽して砂漠化に拍車をかけている。

東南アジアの森林は焼畑農業と、世界一の木材輸入国日本の影響による荒廃が著るしい。また地球上の大気の酸素供給源であるアマゾンの密林も、大規模開発の焼畑によって将来が心配されている。これは生物の危機招来だ。

現在森林の荒廃は南方の後発国で著るしいが、先進国としてもいろいろの問題がある。北海道と同様の森と湖の国スェーデンも、豊かな森林の七十パーセントが活力を失いつつある。これは他国の近代化・工業化に伴う酸性雨の賃い公害だ。わが国では当面こうした影響は無いが、中国の近代化計画の進展によっては、酸性雨の心配がないわけではないし、自国内発生の工場や自動車排ガスの大気汚染が、世界の超一流国という不名誉な実績となっているし、先に述べたようにマツクイムシの被害も大きい。このままでは緑の地球が灰色の地球になってしまうことは必定だ。

ではいったいどうしたらよいのであろう。第一は森林が果たす大気浄化機能と、保水・土砂流失防止機能、それに生態系の維持機能の大切さをはっきりと認識することであり、第二はその対策として、人口問題・食糧政策・焼畑農民の定住化、荒地や砂漠の緑化推

進を地球的視点で実施することであり、第三は経済大国や軍事大国等の先進諸国が、未来のために軍備を縮少しつつ、地球の緑の拡大をはかることが、本当の平和の道であるという発想へ転換をはかり、これを強力に実行することであろう。

特に戦争を放棄した経済大国日本は、世界一の木材輸入国として、東南アジアの伐採地に補植造林する義務があろうし、黒字国としての経済摩擦も深刻な問題だ。幸いわが国の砂漠緑化技術は世界のトップレベルにある。アフリカ・中近東・メキシコの砂漠緑化事業も、小規模ながら成功を収めている。今こそ当面するもろもろの問題点を解消するため、わが国が率先して兵器を緑に変えるための努力を払うべき時期ではなかろうか。

これは幼いペンを大上段にふりかざした暴論と言われるかも知れないが、私として未来の生物と地球の緑を守るためのまじめな話なのである。

山村過疎対策と緑

ローマとパリでは水の高価なことを思い知らされた。コーヒーやワインと同様の高額さである。それでいて蒸溜水のためまことにおいしくない。

幸いわが国は温帯の比較的多雨地帯にあって、水量が豊富でまことにおいしい。「湯水のごとく」という言葉があるが、それはただ同様のものを豊富に使うことを意味している。ヨーロッパで日本と同様に水道の水をガブガブ飲んだなら、たちまち腹をこわすことはうけあいである。

この点わが国はたいへん恵まれた国だ。これは温帯多雨という好条件と、農を基本とした民族が、平野部に稲を育て山岳部に森を育てる風習を長く継承してきたおかげである。特に山林の育成は、山と傾斜地の多いわが国では天然のダムとして保水や災害の防止に大きな役割りを果たしてきた。この点は肉食＝畜産を主とし、山岳部まで樹木を伐採して過放牧した西欧諸国に見られないすばらしい利点だった。

だが、最近になってこのサイクルが少々あやしくなってきた。高度成長以後の経済優先の考え方が歯車を狂わせてきたのである。

林業はマラソンのような気の遠くなるほど根気のいる仕事だ。植樹・下草刈り・間伐・枝うちなど、数十年の苦しい労働を強いられる。そのうえ居住区は都会の便利性とは程遠い山間へき地である。まさに忍耐産業と言い得よう。

しかし経済的に引き合う時期はまだよかったが、最近は輸入材に押されて木材価格が低迷し、造林に不可欠な間伐作業も、労働運搬費が間伐材の売価より高くつくようになってしまった。ブレーキを失った山村では過疎が進行し、国鉄と並ぶ赤字経営としての林野行政の合理化が過疎に追い打ちをかけた。

このため造林地では、間伐も枝打ちも行われないひ弱な樹林が多くなり、天然のダム機能を失って土砂崩壊の防止はおろか、山林自体が土砂と共に崩壊するという、かつては考えられもしなかった災害まで発生するようになった。豪雪に耐えきれず倒壊する樹木も多いという。

山と急流・台風と降雨降雪の多い日本の山林の崩壊は、そのまま国土の崩壊を意味する。やがて恵まれた水は魔水となって人口が過集中した都会を襲うことであろう。洪水を守り円滑に水を供給しているのは、上流部の人びとの労力と豊かな森林に支えられているからなのだ。

こうした状況の中で、林業を経済だけで割り切り、森林崩壊を傍観していてよいのであろうか。つい先日NHK総合テレビで放映した参考となる数字があったので、これを見てみよう。

日本の森林の１年間の生産価値

種別	価値	構成比
木材生産額	一兆三千億	四・二%
水源かん養機能価値	四兆一千億	一三・三%
水害防止機能価値	二兆五千億	八・一%
山崩れ防止機能価値	九兆一千億	二九・四%
保健休養機能価値	七兆四千億	二三・九%
大気浄化機能価値	六兆五千億	二一・一%
合計	三〇兆九千億	一〇〇・〇%

この数字によれば、わが国の森林機能を金額に換算すると、年総額は約三十一兆円という巨額に達する。これは本年度の国の一般会計五十二兆円の六十パーセントにも及ぶぼう大なものだ。

この中で重視しなければならないのは、山林を危機に落し入れている林業の経済性と

は、木材としての価値一兆三千億の生産性のことであり、それは全体の僅か四・二パーセントにすぎず、残りの九五・八パーセントを対象とせずに評価していることである。これは氷山の一角より以下の低い次元の議論でしかない。

中近東のアブダビでは、僅かな植林地の補水のため、一日二億円もの経費を投入しているという。破壊した自然に緑を復活させるためには、何と巨額な経費を要することか。

ここで考えてみよう。年三十一兆にも達するわが国の森林の生産価値は、自然の恵みと長年にわたる先人の努力の遺産だ。いわば定期預金である。木材の生産額はその利子にすぎない。利子が少くなったからと言って元金の蓄積をおろそかにすると、巨額のつけが回ってくる。水害・山崩れ・渇水等の天災である。

では行革がらみの苦しい国の予算の中でどう対応したらよいのであろう。私に一つの提言がある。わが国では多かれ少なかれ川に添って人間の生活がある。中流には中小都市・下流部には大都市が所在することが多い。それは森林の生産価値が示すように、水源かん養・水害防止・山崩れ防止等森林の持つ諸機能が、直接・間接に流域の人びとの生活を守っているからなのだ。

この点を重視して、流域に住む人びとが全体で上流の山林を守り、連帯感を深めるシステムを導入してはどうであろうか。財源としては比較的安い水道料金に水源かん養税のようなものを付加し、これを山村に還元して過疎防止と美林育成に役立てたいものだ。

このことは国有林が多く、営林局の合理化が進む北海道でも真剣に取り組まなければならない問題だ。北海道ではいま下流部の巨大プロジェクトに重点が置かれているが、かつて木材王国を誇った町村の過疎現象は深刻だ。上流部の健全な維持発展なしには下流部の発展はあり得ない。

北海道の森と自然

がらにもなく世界の森林や国内のそれについて大きなスペースを使ってしまった。これは私のような素人でも北海道の森を語るには、より大きな視野で基本を考えなければ木を見て森を見ないこととなることが心配だからである。以下拙論ではあるが北海道の森と自然について述べてみたい。

私の子供のころ、たくさんの木材が筏に組まれ、釧路川の本支流を下って釧路港に流送されていた。ところが今はどうであろう。筏とは外国からの輸入材を上流の水中貯木場へ輸送する手段となってしまった。

現在北海道では国鉄の赤字ローカル線の存廃が大きな問題となっているが、これは運営を支える貨物輸送、特に木材輸送の不振が廃止の大きな要因となっている。国鉄から木材輸送を奪ったトラックにしても、道産材の輸送よりも、外材輸送のウエイトが高くなっているようだ。このようにかって無尽蔵の木材王国を誇った北海道も、外材依存＝外国山林の荒廃を招く消費地となってしまった。

いま一つ問題点がある。それは歴史の浅い北海道の開拓が、木と泥炭地との戦いから始められたため、自然の破壊が比較的安易に受入れられることだ。川の上流部では木を伐り、果ては焼き払って荒々しい開拓を実施し、下流部では河川改修と泥炭地の客土で切り拓いた。今問題となっている千歳川を日本海から太平洋に切り換えようとする大型プロジェクトも、石狩川流域の泥炭地を遊水の余地もなく開拓し尽した結果にほかならない。

それと道内の森林蓄積が林野庁所管のものが全体の六十四パーセントを占め、私有林が二十パーセントに過ぎないことも問題だし、樹木別内訳も天然林が八十五パーセントで、人工林は僅か十五パーセントしかないことにも心配がある。

これは北海道特有の官依存・資源収奪の体質が凝縮しているからだ。現在全国で最も不況からの脱出が遅れている北海道経済も、国の開発予算に大きく依存し、国家予算の圧縮と共に冷え込んでいるものであるし、国有林のウエイトの高いことは、営林局の合理化の波をもろにかぶっていることを物語る。

川の上流域の森林の大切さや、それ守るための財源等については、前項で拙論を提起したのでここでは省略するが、民有林や人工林の蓄積量の増大をぜひ実現するよう要望しておきたい。それは官依存からの脱皮と、北海道の総ての産業が欠落している育成の努力や、恵まれた自然への感謝の心の補完のために必要だからである。人工林育成の苦労を知らずして、天然林のありがたさを知ることはできない。

さて、開拓を主とした北海道では、美しい自然が幾度か破壊の危機に見舞われている。次に自然保護の足どりを見ておこう。

北海道の緑の危機は開拓当初から始まるが、特に資本主義の勃興期を迎えた明治二十

年の北海道国有未開地処分法は、その名のとおり立木付き五〇〇～八三〇ヘクタールの土地を、無償で手に入れることができるという荒々しいものだった。それは北海道の山荒しの横行につながった。

これに対し、道内の自然保護のための布石が予想以上早く実施され、他府県より常に一歩リードしていたことが特筆される。札幌郊外の風致林として残る円山から藻岩山一帯にかけての美林は、明治十年に禁伐林として保護されたものであるし、野幌の森林公園も明治三十年代に北越殖民社農民の熱心な保護運動によって残された貴重な財産である。

森林法の制定は明治三十年のことであるが北海道庁では森林法が施行される前後から保安林予定地を調査し、六三六箇所、十六万五千町歩を選定し、順次正式な保安林に編入したことも勝れた先見だった。この中には風致林として洞爺湖周辺の森林が指定され、そのおかげで今日の洞爺湖観光の繁栄がある功績を見逃すことはできない。

また、大正八年の史蹟名勝天然記念物保存法成立以前に、原生天然林保護の布石が打たれていたことも特筆される。それは大正二年から四年にかけて指定された札幌藻岩・円山、洞爺湖中島、屈斜路湖中島など十一箇所五九二二町歩の原生天然保存林で、この中にはいま道路敷設問題でゆれている根室シュンクニタイの針広原始林が含まれている。

国立公園の指定は昭和九年のことで、道内では阿寒・大雪山の二つが第一期指定を受けたが、国立公園制定の運動ははるかに早く、明治四十四年帝国議会に提出された「日光ヲ大日本帝国公園ト為スノ請願」を嚆矢とするが、同じ年に愛別村長太田竜太郎から「石狩川上流霊域保護国立公園経営ノ件」が、逓信大臣兼鉄道院総裁あて提出されており、大雪山国立公園実現の先見として高く評価される。

また、戦時中においても北海道景勝地協会が中心となって道立公園や、支笏洞爺国立公園実現の運動がなされており、これが母体となって戦後いち早く支笏洞爺国立公園を誕生させ、やがて道立自然公園の誕生、国定公園の指定へと発展していった。

道内には現在国立公園五、国定公園四、道立自然公園十四が所在し、その他多くの天然記念物や文化財が指定されているが、これは自然保護思想の普及しないはるか以前、開拓優先の世相の中で幾多の困難な問題を解決しつつ残された、勝れた先輩の先見が土台になっている。このことについてふれるスペースの無いことは残念だが、観光業界がいま時流に乗って求めている便利性や体験旅行のために、貴重な遺産を破壊することは厳につつしまなければならない。冒頭に述べたとおり、草津白根山や奥志賀と同様の結果となり、北海道の魅力の大部分をそう失してしまうのだから。

青い湖を守ろう

北海道が湖の豊庫であり、森や広さと共に湖が最大の魅力であることは先に見た。だが問題点も多い。私の住む釧路地方に全道の湖沼の共通課題となる湖があるので、参考に記載しよう。

最初はマリモで有名な阿寒湖である。ここは富栄養湖ではあるが水は清かった。だが観光客が増加すると共に旅館や民家がふえ、昭和四十年代にはジュズモが発生し、夏の観光最盛期がそのピークで、見苦しい阿寒湖を多数の観光客に呈するようになってしまった。

これではいけないと特定環境保全公共下水道工事が始められたのは昭和五十年で、当初予算は約三十億円だった。この工事は今も継続され、完成時にはヘドロの処理を含めると総額は七十億円の巨額に達すると言われる。

この工事による生産性は何も期待されない。あるのはマリモを守るためと、阿寒湖観光発展の永遠を願うだけである。そのために八千人に満たない阿寒町民が巨費の負担に耐えているのである。高価な代償だ。

次は釧路市内の春採湖で、私の小学校のころ体育のため水泳をした湖である。だが今は炭砿の貯炭場として一部が埋立てられ、周辺に密集した人家からの汚水が加わって、死の湖寸前となってしまった。

幸い昨年十一月の調査で、この湖に棲む天然記念物ヒブナの成育が確認され、市は抜気塔の設置や、春採湖総合対策プロジェクトを編成しその対策に真剣だが、一度汚した湖の浄化には巨費と長い年月が必要となろう。

〝神秘の湖〟摩周湖にも問題があった。摩周湖は昭和六年の調査で透明度四一・六メートルを記録し、世界一を誇っていた。だが、大正十五年に養殖のためニジマスとスチールヘットが放流され、以後継続して孵化事業が実施されたことが要因となって、昭和五十五年の調査では透明度が三五・八メートルに落ちてしまった。

そのうえ数十年間実施した孵化事業も、魚の成育が採算ラインに到達せず、遂には中止になってしまった。このことは現在課題となっている支笏湖のヒメマス対策に暗示を与えているのではなかろうか。

わが国の湖沼分布は東北日本に多く、特に北海道に著るしい。北海道では緑濃い森林に囲まれた青い火山湖が多いだけでなく、海岸部には原生花園を伴ったラグーンが数多く点在する。私たちの生活のためにも、遠来の観光客にとってもこんな恵まれた環境は他に例を見ない。

昨年八月琵琶湖の汚染対策に取り組んでいる大津市で世界湖沼環境会議が開催され、湖沼を「文明の症状を映す鏡」と認識し、遅れ馳せながら湖沼法も成立した。今年は湖への排水基準が強化された。だが骨抜き法とかなまぬるい基準との評もある。

先に述べたように湖の浄化には巨費と長期間の継続努力が必要だ。北海道としてはまず湖水の汚濁を現状にとどめるため、法や基準を上回る規制を実施し、その上で湖沼ごとの対策を考えておくべきではなかろうか。

更にあまりにも恵まれすぎて道民に見逃されている湖沼の存在価値を再認識し、また湖沼の持つ自然の浄化能力を過信せずに接することがより大切だ。このためには今後湖周辺の開発は厳しく抑制すると共に、増設等に対しても下水道処理の不十分なものは、不許可とする強い姿勢が望ましい。それは「北海道の文明のすばらしさを映す鏡」となるのだから。

自然保護と発展と

私は開発という言葉がどうも気に入らない。特に自然保護に関心を持つようになってからは「開き発つ」という語意が、調和や保護などの考えを入れる余地の無い開発優先というように理解されてならないからだ。

道としても戦前の開拓計画を戦後は開発計画に変え、最近は発展計画に改めた。これならば計画にあたって改変することが未来の発展につながるのか、保護することが将来のためになるのか選択の余地が残るようだ。この微妙な余韻は大切にしなければならない。そして道が他府県に先がけて実施している環境アセスメントも、計画を実現する道程として審議するのではなく、何が未来のためなのか徹底的に議論する場であってほしい。

自然保護に重大な影響力を持つ観光に対しては、語源に帰れと提唱したい。観光とは観光客に対しては「地方の勝れた文物を敬意を持って見る」ことを意味し、地元民には「地元の勝れた文物を誇りを持って示す」という双方への権利義務を内容としている。

この本意が理解され実行されれば、旅の恥はかき捨て方式の観光客のマナーは著るしく向上するであろうし、観光業者の乱開発は改善するであろう。勝れた北海道の大自然は日本に残された数少い貴重な財産であり、観光業者にとっての自然は大切な資本金で、資本を食いつぶしての観光発展はあり得ないのだから。もし改変の余地があるとすれば、それは既に乱開発した自然への調和ある修復へと目が向くことであろう。

さて、自然保護と自然の利用も常に相反し保護運動が空転する要因になっているようだ。だが一部には異論はあるが、自然公園法の精神も、狭い日本の国の自然と稠密な人口問題を配意して、保護と利用の双方を満足させる法律となっている。

自然保護運動を推進する上で最も必要なことは、自然に接しその貴重さを膚で感じさせることが大切で、そうした利用者を拡大し、より普遍化して道民運動にまで発展させるべきではなかろうかと考えている。

最近都市の学校に多いイジメの問題や、親子の断絶も、コンクリート砂漠の中でのあふれる情報や、機械や公害の渦の中で、自然への回帰を忘れたために生じているのではなかろうか。心身のクリーニングが必要なのではあるまいか。

人間は知恵はあっても所詮は動物だ。自然の中で子供を動物本能に回帰させ、親子が共に汗を流して登山をし、森林浴をし、キャンプで共に炊飯する機会が多くなれば、イジメや断絶はグッと少くなると確信している。そしてその対象が最も多いのが北海道だ。

だが利用にあたっての日本人のマナーも問題がある。厳しい北海道の風雪を幾百年も耐え抜いた亜寒帯原生林が、一本のタバコで烏有に帰することは簡単だが、復元することは不可能だ。

そこで提案だが、道内の自然を再点検して、そのまま未来に引継ぐべき貴重なものは、原生環境保全地域に指定し、指定の対象外となる私有地等は、北海道ナショナルトラストを創設して、行政と道民の共有財産として永遠に保護することである。

また、貴重ではあるが利用も望ましい地域については、監視体制を強化して解放すべ

きであろう。そしてその財源としては、美化財団が一部で実施している観光地駐車場の有料化を更に促進し、高齢者の生きがいと職を保証するシルバー・レンジャー制を採用してはいかがであろうか。そして将来は自然保護税等抜本的な対策を講ずることも提言しておきたい。高齢化社会への対応のためにも。

いまひとつ基本的なものがある。北海道の自然愛護教育の充実だ。歴史の浅い北海道はその分だけ大自然が豊かに残されている。郷土読本や社会科学習の中に、自然の営みや恵みや、その大切さ保護のあり方等を、学年に応じて徹底した教育を実践することである。回り道ではあるが、これが北海道の自然を守る最大の母体となろう。

おわりに

尻切れトンボの拙論も終りとなった。ここで私の尊敬するお二人の言葉を書きとめてペンを折りたい。

おひとりは三代目一歩園主前田光子さんが、死去される直前に言われた、「自然保護というけれど、人間は自然に保護されて生きているのです。思いあがりはいけません」というお言葉だった。阿寒湖畔の一本の木を間引するにも、自ら実地検証した前田光子さんならではの真理で、そのご遺志により財団法人前田一歩園財団は、全国的にも例の無い個人所有地の自然保護財団となった。女ひとりのナショナルトラストの具現である。

いまおひとりは、日本の国立公園と自然保護運動の父と言われる田村剛博士が、八十五歳という高齢で私に与えたお言葉で、「北海道の公園では原始性の保存が一番重要な政策だろうと思います。(中略) 都会を離れたところでは、豊かな自然がだれにでも、だれでもですよ、学者だけではない、国民全体が味わえるような環境を残さなければならない」と述べられている。生涯を自然公園とその保護に捧げた老博士が、自ら学者と保護論者の偏重をいましめておられたのである。

自然保護活動を着実に実践するには、お二人の心構えが何よりも優先するのではなかろうか。